

体育系大学生のスポーツボランティア活動に関する実態と参加意向

—2020 東京五輪に向けて—

スポーツマーケティングゼミナール 1313056 廣田 健一

1. 研究動機・研究目的

近年、市民による地域や社会に対するボランティアの意識や関心は様々な分野において高まっている。日本のボランティア団体数の推移は、全国社会福祉協議会（2005）によると、1980 年の調査開始以来年々増加している。更に、ボランティア活動者は 2005 年時点で約 740 万人であり、1980 年から約 5 倍に増加している。その一方でスポーツボランティアに焦点を当てると、笹川スポーツ財団（2011・2014）の調査では、成人のスポーツボランティアの実施率は 1994 年から 2014 年まで 6～8%とほぼ横ばい状態であることが報告されている。文部科学省による「スポーツ基本計画」（2012）では、今後 10 年間を見通したスポーツ推進の基本方針として、指導者やスポーツボランティアといった「支える（育てる）人」に着目し、人々が生涯にわたってスポーツに親しむことができる環境を整えるものとしている。具体政策の 1 つとして、スポーツボランティア活動の普及促進が挙げられている。更に、2015 年 10 月にはスポーツ庁が発足し、2019～2021 年にかけて連続してメガスポーツイベントが開催されるなど、日本のスポーツボランティア活動の変革期に差し掛かっていると言える。特に 2020 年に開催される東京オリンピック・パラリンピックでは約 9 万人のボランティア参加者を募る予定であり、参加者の量・質ともに高いものが求められる。従って、この変革期の活動が将来の日本のスポーツ界、更には日本の社会全体に大きな影響を与える可能性も高いと考えられる。

そこで本研究では、スポーツと日頃から関わりが強く、他の年代、他の職業より時間的余裕があると推測される体育系大学生を対象とした質問紙調査から、スポーツボランティア実施状況と、2020 年の東京オリンピック・パラリンピックにおけるボランティア参加意向について明らかにしていく。

2. 研究方法

【調査対象】 某体育系大学のスポーツ健康科学部生

【調査方法】 2016 年 11 月に某体育系大学の授業内にて質問紙を直接配布し、回収した。有効回答数は 441 部（回収数 442 部）

【調査内容】 個人的属性（9 項目）、スポーツボランティア活動の実施状況・実施希望関連（5 項目）、2020 年東京オリンピック・パラリンピックにおけるボランティア実施希望、実施希望内容、実施不可能要因等（6 項目）、また、スポーツボランティア活動参加に対して必要だと思う取り組み（1 項目）を網羅した。

【分析方法】 全ての統計は、IBM SPSS Statistics 20 を用いて、単純集計及びクロス集計で各項目を比較した

3. 主な結果と考察

1) スポーツボランティア活動の実態

スポーツボランティア未経験者の割合は、全体が 40.8%、性別で比較すると、男性が 47.1%、女性が 29.8%と男性の方が多いという結果であった。主な参加動機としては「学校・部活・同好会・職場で勧められた」が 48.9%で最も多く、実施内容は「地域の大会・イベントの運営・補助」が 63.7%で最も多かった。

2) 今後のスポーツボランティア参加について

スポーツボランティアに参加意向がある人の大半はボランティア内容の負担度が軽く、気軽に行えることを重要な条件としていることが分かった。その一方で、今後のスポーツボランティア活動への参加について、やりたいことが明確になっている回答者ほどスポーツボランティア活動に力を入れたいと考えていることも明らかになった。

2020 東京オリンピックのボランティア参加については、回答者全体の 78.4%が参加意向を示し、同年パラリンピック大会のボランティア参加については、69.6%が参加意向を示した。この結果は先行研究と比較して、両大会とも高い割合であった。また、両大会ともに女性の方が男性よりも参加意向の強いことが明らかになった。参加したいボランティア内容については、「競技運営補助・セレモニー補助・会場整理」が上位3項目であった。回答者の多くが専門的な競技経験や専門知識を有していることなどが一要因として考えられるが、統計的な根拠をあげることができなかった。また、開催年までに最も取ろうと思う行動は「ボランティア経験を積む」であり、募集する団体や必要な手続きなどの情報を十分に周知することも重要と感じていることが明らかになった。

4. 結論

今回の調査より、調査対象である体育会系大学生のスポーツボランティア活動状況として、半数以上がスポーツボランティア経験者であり、地域の大会・イベントの運営・補助に最も多く参加していることが明らかとなった。また、スポーツボランティアについて、やりたいことが明確な学生ほど活動に力を入れたいと考える傾向にある一方で、参加意向があるものの、やりたいことが不透明な体育系大学生が大半であることが明らかになった。

2020 東京オリンピック・パラリンピックのボランティア参加については、世論調査の結果よりも遥かに高い参加意向を持ち、競技運営補助やセレモニー補助など競技そのものや参加選手と近い距離での参加を望んでることが伺えた。実際に参加する前には、ボランティア経験を積むことを最優先事項と考え、国や政府に対して募集团体や手続きの情報を周知することや、時間的制約の緩和、知識や技術に関するトレーニングの充実を求めていることが明らかになった。

5. 卒業論文の執筆を終えて

学生生活の集大成として、渾身の卒業論文を執筆する意気込みで取り組んで参りました。調査を進めるにあたり、先行研究の勉強不足やスケジュール管理不足などにより、有益な回答が得られる質問項目を設定できず、納得のいく卒業論文には至りませんでした。しかし、担当教員の工藤先生をはじめ、先輩方や同級生、後輩の皆様の励ましと助言を頂けたからこそ、新たな知見を得ることができ、大変感謝の気持ちでいっぱいです。有難うございました。